



黒石津軽家江戸屋敷跡
(墨田区立川4丁目：現区立菊川小学校周辺 筆者撮影)

本連載第123号で、江

戸にあった盛岡藩南部家の分家旗本として、魏町南部家を紹介したが、弘前藩津軽家における同様の存在に黒石津軽家があった。石高5000石(のち4000石)の幕府直属の旗本で、江戸後期、1809(文化6)年に本家津軽家の北方警備による功績で1万石の大名に昇格した。魏町南部家も最初石高は5000石で、黒石津軽家が大名となった10年後にやはり1万1000石の大名になったので、同じような軌跡をた

どっている。

黒石津軽家は弘前藩2代藩主津軽信枚の次男信英を祖とする。1655(明暦元)年に兄である3代信義が亡くなったあと、甥の4代信政が幼かったため、幕府から後見役を命じられ、翌年2月に幕府直属の旗本として分家したものである。

黒石津軽家の主な役割は、まず徳川將軍家における御三家のように、藩主の血筋が絶えたときの「血のスペア」としての存在があった。実際に6代寧親と

9代順徳が本家の家督を継いでいる。

そして初代信英が特に顕著であるが、江戸における本家の名代役が主な役割であった。このような分家旗本は、松前藩松前家などでもみられる。

黒石津軽家が魏町南部家と異なるのは、国元に領地を持っていたことである。弘

前本藩から、現在の黒石市の大部分と、平内町が領地として与えられ、黒石に陣屋を置いた。旗本身分であるが不定期に参勤交代を行なっており、このような存在を「交代寄合」という。とはいえ、代々の当主は江戸を生活の本拠とし、特に幕府から許可を得た場合でない限り、黒石の地を踏むことはなかった。旗本としても、このクラスとなると

江戸にあった津軽家の分家旗本

中野渡 一 耕

(県民生活文化課
県史編さんグループ総括主幹)

が、吉良の屋敷も本所であり、事件の翌朝、吉良邸に真つ先に駆けつけたのが政兇だったという。

07名、領地経営の必要がなかった魏町南部家に比べると、似たような石高でも家臣団の数は多かった。藩政においては弘前本藩の指導・統制を受け、当主が幼少の時は、弘前藩士が附家老として派遣されることもあった。

江戸城で日々の勤務がある訳ではなく、不定期に江戸城の門番役を務めたりするのが主な業務である。比較的時間に余裕があるせいか、3代津軽政兇のように趣味に生き、日本最古の釣り指南書とされる『何羨録』を著した当主もいた。この政兇は、赤穂浪士事件で有名な吉良義央の娘を妻としていた。黒石津軽家の江戸屋敷は本所三ツ目通にあった

江戸後期の大名昇格に伴い、黒石津軽家も定期的な参勤交代を行うようになったが、その時期は本家とずらし、弘前藩主と黒石藩主は交互に在国するようにした。いわば弘前藩の「副藩主」として権威を強化させ、蝦夷地や領内の警固にあたらせようとしたのだった。黒石津軽家の家臣の数は1847(弘化4)年の時点では140名(足軽を除く)、うち黒石在住は1

現墨田区立菊川小学校周辺だが、跡は何も残っていない。弘前藩の上屋敷跡も同じ本所にあり(現墨田区緑町公園、すみだ北斎美術館周辺)、歩くと約15分くらいである。散歩がてら訪れてみては如何だろうか。



江戸切絵図「深川絵図」(1849~62年刊)から
黒石津軽家江戸屋敷(黒丸で囲った部分)
(国立国会図書館デジタルコレクション)